

史料紹介と研究

「首里城並諸方絵図間付差図帳」について

黒嶋 敏

はじめに

東京大学史料編纂所に所蔵される維新史料引継本のなかに、「首里城並諸方絵図間付差図帳（以下、「差図帳」と略記）」と題する、首里城など七施設の絵図写本がある^①。これを初めて紹介した「伊従二〇〇七」は、所収絵図から首里城・円覚寺・崇元寺分をカラーで掲げ、戦前に首里城復元事業に携わった森政三の古写真にある絵図との類似から、「差図帳」の原図が一七〇一年から首里王府が推進した主要施設の絵図・差図製作事業に遡る可能性を指摘した。これを受け「安里二〇一三」は、この主要施設の絵図・差図製作事業のなかに「差図帳」などを位置づけ、「差図帳」の絵図全点を検討し、建物の描写や測量方法の違いから複数の製作年次が確認されることを論証した。両氏の研究により「差図帳」の史料的な意義が明らかとなったのだが、一方で書誌的な伝来過程は、「昭和九年四月二二日」の購入印があるのみで明証を欠き、「入手先は不明」（「伊従二〇〇七」注八）とされたままとなっている。そこで小論では、「差図帳」所収の絵図全七点をカラーで掲載するとともに、その伝来過程について述べてみたい。結論を先にすれば、「差図帳」の原本は戦前に首里の尚家が所蔵していたものである。いうまでもなく尚家は、琉球国王家の後裔であり、琉球処分後には侯爵となって東京に居を移したものの、相伝の歴史史料の大部分を首里の邸宅に残し置いていた。まずは、その尚家所蔵史料から「差図帳」が写される経緯を紹介していきたい。

一 森谷秀亮の尚家所蔵史料調査

既述のように、「差図帳」には「昭和九年四月二二日」付けの維新史料編

纂会図書部の購入印が捺されている。じつはこの直前、同会の維新史料編纂官である森谷秀亮が、沖縄・台湾で史料調査を行っていた。同年（一九三四）二月中旬に東京を発ち、三月二十八日に帰京したこの調査については、本人が十一月に提出した「鹿児島沖繩二県史料探訪報告書（昭和九年三月）」の原本が残り、五月に行った講演録「台湾琉球を旅して」が別にあることから、調査の目的・行程・史料調査先・見学地・関係者の人名など詳細を明らかにしよう^②。森谷は史料調査・史跡踏査を精力的に行っており、半月ほどの那覇・首里の滞在期間中に、沖縄県立図書館に寄託されたばかりの「歴代宝案」の情報にも偶然接して閲覧を試みるなどしていた。多忙を極めたことを、自身は「史料の検閲に手間取った」（講演録七七頁）と述懐している。

この森谷の調査については、報告書をもとに、戦前の首里尚家文書を閲覧した事例として紹介した「真栄平二〇〇八」がある。尚家所蔵史料は未整理で保存状態も悪かったため、外部からの閲覧申請を謝絶していたが、森谷は事前に尚侯爵家につながる複数の縁故を頼って調整を試み、どうにか閲覧に漕ぎつけた珍しいケースになる。「今次小官出張ノ主要眼目ハ実ニ尚家秘庫ヲ検スルニアリ」と記すように（報告書）、出張の最大の目的が尚家訪問であった。当時の尚家所蔵史料の状況を、報告書とは別の角度から見よう。

史料1 講演録四三〜四四頁

今度行つて見ますと、点数は詳しいことは分りませんが、二三千点は確かにあるやうで御座います。只残念なことには保存整理が不十分で破損・虫損の程度が甚しく、従つて又、完全な目録が出来て居りませんことで、此の事は尚家の方でも残念がつて居られて、数年前から裏打をされたり修理に努めて居られますが、何分点数が多いのと、片手間にやつてゐるので、今後可成りの年数がかゝること、思ひます。一寸見ましたところ、外国関係の史料、幕末から明治初年の廃藩頃までの重要なものは、曾て東京の本邸で尚泰侯実録の編纂をされた関係からこちらにあるやうですが、それ以外にも向うに沢山あります。私が手当り次第に蔵から出して貰ひ、自分で作った目録を見ても、中々重要なものがあります。

蔵の中に保管された尚家所蔵史料は、概算で「二三千点」に及ぶ大規模なものだったが、目録すらなく保存状態も劣悪だった。このうち、数年前から修復作業も進めているが十分に進捗してないという情報は、報告書には未記載のものである。こうした状況では、仮目録作成（「自分で作った目録」と並行しながらの調査となるため、少なくとも数日を要したであろう。そしてその過程で、森谷は尚家所蔵史料の全容に関する知識を深め、次の「御城並諸方絵図間付差図帳」の存在も知りえたと考えられる。この絵図帳の名は、報告書で、森谷が踏査した首里城の説明をする箇所が登場する。

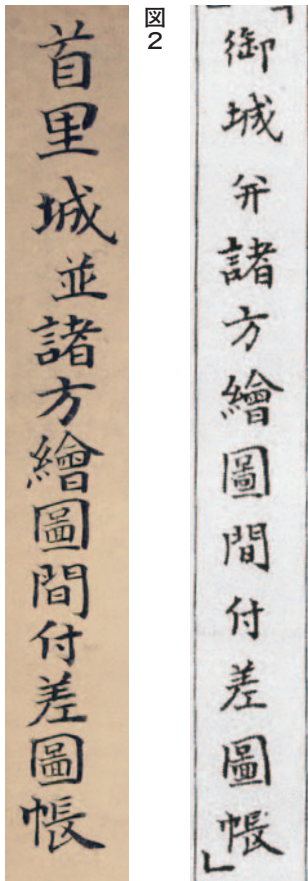
史料2 報告書

首里城配置ノ有様ハ、尚家所蔵「旧首里城平面図」「御城並諸方絵図間付差図帳」ニヨリテ知ルヲ得ベシ、

いま史料編纂所に所蔵される「差図帳」の原本が、この尚家所蔵「御城並諸方絵図間付差図帳」に該当する。以下にその論拠を述べたい。

まず、「差図帳」と同じく、史料編纂所所蔵の維新史料引継本のなかに、「首里城平面図」と題する一枚の絵図写本があり、「差図帳」と同日付の維新史料編纂会図書部の購入印が捺してある。⁽⁵⁾ この二点が史料2にある「旧首里城平面図」「御城並諸方絵図間付差図帳」と一致すると考えられる。

次に、筆跡の類似がある。森谷自身が記した報告書の文字（**図1**）と、「差図帳」の題箋（**図2**）、および「差図帳」所収首里城図（後掲**図3**）の書



き込みにある「御城 首里」の部分とを比較すると、楷書で、よく似ている印象を受ける。後掲する「差図帳」絵図中の書き込みのうち、朱筆の間付・

方位などの文字は崩れているため一見すると別人のようだが、これも報告書で森谷が崩して書いた漢数字（とくに「四」「五」「六」）と類似している。「差図帳」中の文字は、いずれも森谷の筆跡である可能性が高い。

なお、文字以外の描画・彩色者については確証をえないが、森谷は尚家での調査時に「地方人ノ帯同ナキ」ことを厳守させられている（報告書）。当時、所蔵史料の公開を求める声が高まっていたながら、尚家側は未整理を理由に拒否しており、そのなかで森谷だけが特例的に閲覧を許されたための措置であった。この制約下では森谷単独の訪問・調査で、絵図から転写したのも森谷自身だったことになる。この「差図帳」の現状が薄紙を袖側で綴じた簡弁なもので、描画に簡略な部分があるのは、原本のうえから森谷が簡易的にトレースしたことによるのではないか。

以上をまとめると、「差図帳」の原本は、首里の尚家所蔵史料中にある絵図帳「御城並諸方絵図間付差図帳」であり、「差図帳」は森谷自身がそこから写し取ったトレース図であると考えられる。

二 七つの施設の意味

次に、「差図帳」所収絵図七点（①～⑦）を図版で紹介し、「伊従二〇〇七」「安里二〇一三」に学びながら各絵図の特徴を記していきたい。いずれも彩色され、十字法で測量した間付の数値と方位を朱筆で描き込む。絵図製作時点における各施設の、ある程度正確な実測図として、大きな意義を持つ。

① 首里城図（**図3**）

国王の居城であり、本来の絵図名称は「御城図」とするべきであろう。正殿前の御庭中央に引かれた直線の浮道に段差が生じており、これは「安里二〇一三」の指摘するように、中央部で綴じられていた絵図を転写する際のミスと考えられる。また、「伊従二〇〇七」「安里二〇一三」によれば、森政三古写真の「首里城古絵図」と、朱字記入の文字も含め、極めて類似する。た

だし、樹木描写などに相違点があり、タイトな調査行程のなかで森谷が加筆・創作したとは考えにくい。尚家所蔵の「御城並諸方絵図間付差図帳」にある御城（首里城）図が、森政三古写真に残された「首里城古絵図」とは別の絵図だったことを示唆していよう。なお、①の原図の製作年代について、「安里二〇一三」は建物の描画方法から一七一三年以前と推定している。

② 大美御殿図（図4）

首里城近くの綾門大道に面し、国王世子宅である中城御殿の東隣に位置する。王家一族の別邸で儀礼の場となるほか、一八五三年のペリー来琉時には、臨時の摂政邸と称して一行を接待する会場に使われた。原図の製作年代を、「安里二〇一三」は建物の方位記入から一七一三年以後と推測している（③、④、⑥、⑦も同様）。

③ 玉御殿図（図5）

国王家の陵墓である。図中タイトルにある「首里邑ニアリ」は誤りで、王国時代は金城村の域内になる。これにより、ほかの各絵図に付された図中の「〇〇邑ニアリ」もまた、森谷の追記である可能性が高いことが分かる。

④ 聖現寺図（図6）

聖現寺は那覇港北部の泊に位置し、熊野三社権現を祀る天久権現の神宮寺である。以前「黒嶋二〇一八」で検討したように、図中左上に移転前の天久権現が描かれるので、景観年代は一七一三～一七三四年の間に絞りうる。

⑤ 円覚寺図（図7）

国王家の菩提寺として首里城北側に造営された臨済宗寺院で、琉球第一の寺とされた。「伊従二〇〇七」「安里二〇一三」の指摘するように、森政三古写真の「円覚寺弁財天堂絵図」と似通うが、弁財天堂の向きをはじめ、建物や樹木の描写、方位線などに相違点が多く、両者は別の絵図であると判明する。

⑥ 護国寺図（図8）

護国寺は那覇港近くの波の上に位置し、熊野三社権現を祀る波上権現の神宮寺にあたる。

⑦ 崇元寺図（図9）

崇元寺は那覇市泊にあった臨済宗寺院で、王国時代は国王家の国廟と位置づけられていた。「伊従二〇〇七」「安里二〇一三」では森政三古写真の「崇元寺図」との類似性が指摘されていたが、周囲の雑木林の描写や施設方位の注記位置に相違があり、両者は別の絵図である可能性がある。

以上七点が「差図帳」に所収される。では、原本に当たる尚家所蔵「御城並諸方絵図間付差図帳」も同様に全七点の絵図帳だったのであるか。この問題を考える手がかりは、「伊従二〇〇七」「安里二〇一三」が、「差図帳」および森政三古写真絵図の原図のルーツと想定してきた、一七〇一年に始まる主要施設の絵図指図調整事業との関係である。

史料3 「毛姓上里家家譜」九世盛時⁽⁶⁾

同四十年辛巳三月朔日、御城中、大美御殿、内間御殿、同東之御殿、西原間切嘉手苺村内間御殿、首里殿内、真壁殿内、儀保殿内、平等所、玉御殿、浦添ヨウトリ、今帰仁城、高嶺城、知念城、玉城城、久高島、上天妃、下天妃、館屋、天尊、親見世、通堂、三重城、円覚寺、天王寺、天界寺、崇元寺、安国寺、慈眼院、龍福寺、七宮、金武寺、絵図並指図任奉行職、

康熙四十年（一七〇一）に嘉福（稲福）親雲上盛時が、王府から、「御城（首里城）」をはじめとする王府と関係の深い主要施設の絵図並指図を調整する担当者に任命された記事である。この絵図指図調整事業と、尚家所蔵の「御城並諸方絵図間付差図帳」という名称は親和性を持ち、また、尚家に伝来する必然性も首肯しうる。

だがこのうち、「差図帳」所収図は傍線部分のみとなる。七箇所では主要施設として偏りがあり、何らかの取捨選択が行われたのではないだろうか。そこで、森谷による、首里・那覇での史跡踏査の足跡をたどってみたい。報告書によると森谷が訪問した史跡は、首里市では、首里城、玉陵、識名園、円覚寺であり、那覇市では崇元寺、護国寺、聖現寺を回っている。いずれも森谷にとって「本局ト関係アルモノ」として選択された場所で、識名園以外の六カ所が「差図帳」と合致することに気が付く。首里城が国王の居城とし

で政務・儀式の主要な場所となったことは言うまでもないが、残る玉陵、識名園、円覚寺、崇元寺、護国寺、聖現寺に共通するのは、いずれも冊封使や琉球を訪れた西洋人と関係し、琉球の対外関係において歴史的意義を持つ史跡となる。現地では足を踏み入れていない大美御殿も、ペリー一行の宴席会場となったことから、維新史研究者の森谷が深い関心を示したのである。

以上の状況を踏まえると、尚家所蔵の「御城並諸方絵図間付差図帳」とは、一七〇一年に開始された主要施設の絵図指図調整事業の系譜に連なる、大部の絵図帳だったと考えられる。昭和九年に尚家所蔵史料の閲覧を許された森谷は、そこから自身と維新史料編纂会の関心に沿う施設七点を選び出してトレース図を作成し、東京に持ち帰った後、「首里城並諸方絵図間付差図帳」という史料名を付して維新史料編纂会の図書部に架蔵するに至ったのである。

おわりに

小稿では「差図帳」について、「伊従二〇〇七」「安里二〇一三」に導かれながら、不明とされてきた原図の所蔵者と写本の製作過程を述べてきた。

最後に、これまで指摘されてきた、「差図帳」と一部に類似する絵図を含む森政三古写真との関係に触れておきたい。森谷と森は、ほぼ同世代の人物となるが、既述のように森谷は事前に尚家縁者に相当な根回しをして「秘庫」に入らせているが、その尚家所蔵史料に、森が容易にアクセスしえたと考えにくい。円覚寺の絵図のように、両方で明確に異なる絵図がある以上、森が閲覧したのは、尚家以外に伝来していた絵図であると思われる。

そしてこのことは、戦前の沖縄県内に、複数の類似絵図が伝来していたことを推測させる。一七〇一年から調整された主要施設の絵図指図は、各施設の建て替えなど様々な契機に即して、その都度、更新版が作成されたと考えられ、こうした絵図は王府の関係部署や所縁の個人宅に伝来したであろう。

ここから、戦前の沖縄には、まだこうした絵図や関連史料が一定量残されていたものと推測できる。もちろん、琉球処分の混乱による散逸や、東京の内務省に搬出された後に関東大震災で焼失した史料も大量にあったのは事実

である。それでも、「今度沖縄へ参つて、向ふにも非常に沢山の貴重な史料があることを知り、喜んだ次第でした」（講演録四一〜四二頁）というのは、史料編纂官として現地の状況に接した森谷の、率直な感想であったのだろう。しかし、沖縄戦によって、森谷が調査した「二三千点」に及ぶ首里尚家所蔵史料は多くの貴重な文化財とともに姿を消した。今後、奇跡的にどこかで「御城並諸方絵図間付差図帳」が発見されない限り、森谷が慌ただしい時間なかでトレースした「差図帳」が、原本の歴史情報に迫る貴重な手掛かりとなることは間違いないところである。

【おもな参考文献】

- 安里 進 二〇一三「首里王府の重要施設絵図調整事業」『首里城研究』一五
 伊従 勉 二〇〇七「新発見の「首里城古絵図」の測量法について」『民族芸術』一三三
 黒嶋 敏 二〇一九「第一尚氏期における首里の外港を探る ―画像史料の再検討から―」中世学研究会編『琉球の中世』高志書院
 真栄平房昭 二〇〇八「尚家文書を調査した先駆者の足跡について」科学研究費補助
 金成果報告書『琉球国王家・尚家文書の総合的研究』（研究代表者 豊見山和行）

注

- (1) 請求記号は維新史料引継本Ⅰりー一九九六。
 (2) 東京大学史料編纂所所蔵。請求記号は維新史料引継本Ⅱよー二四。頁数を欠く。以下、同書からの引用は報告書として本文中に略記する。
 (3) 『温知會講演速記録』四六、一九三四年。以下、同書からの引用は講演録として頁数とともに本文中に略記する。
 (4) なお、調査行程は講演録によれば台湾・沖縄県・鹿児島県の順に訪問しているが、報告書では鹿児島・沖縄・台湾の順に記され相違している。その理由は判然としないが、鹿児島・沖縄での調査が出張命令による公務扱いであるのに対し、台湾での調査は「休暇」とされるので、報告書では調整されたものだろうか。
 (5) 東京大学史料編纂所所蔵。請求記号は維新史料引継本Ⅰりー一九九七。同所の所蔵史料目録データベースから画像が公開されている。同図は昭和初年の正殿修理工事に伴うもので、尚家に寄贈されたものか。
 (6) 『那覇市史 家譜資料 三 首里系』六九九頁
 (7) 「差図帳」にある聖現寺・護国寺は、それぞれの神社である天久権現・波上権現が、国王による直接的な祭祀を行う神社として「七宮」に含まれる（「伊従二〇〇七」）。



図3 「差図帳」首里城図

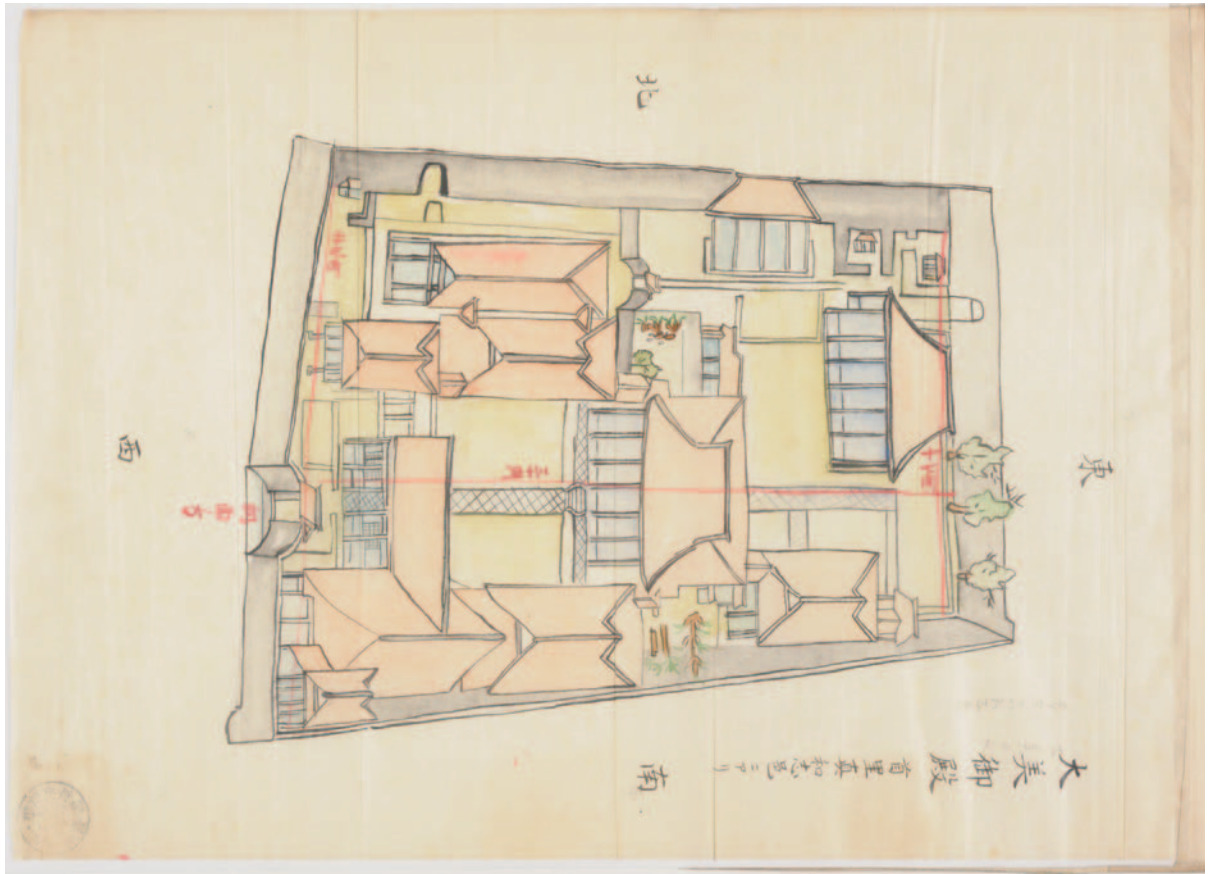


图4 「差図帳」大美女殿図

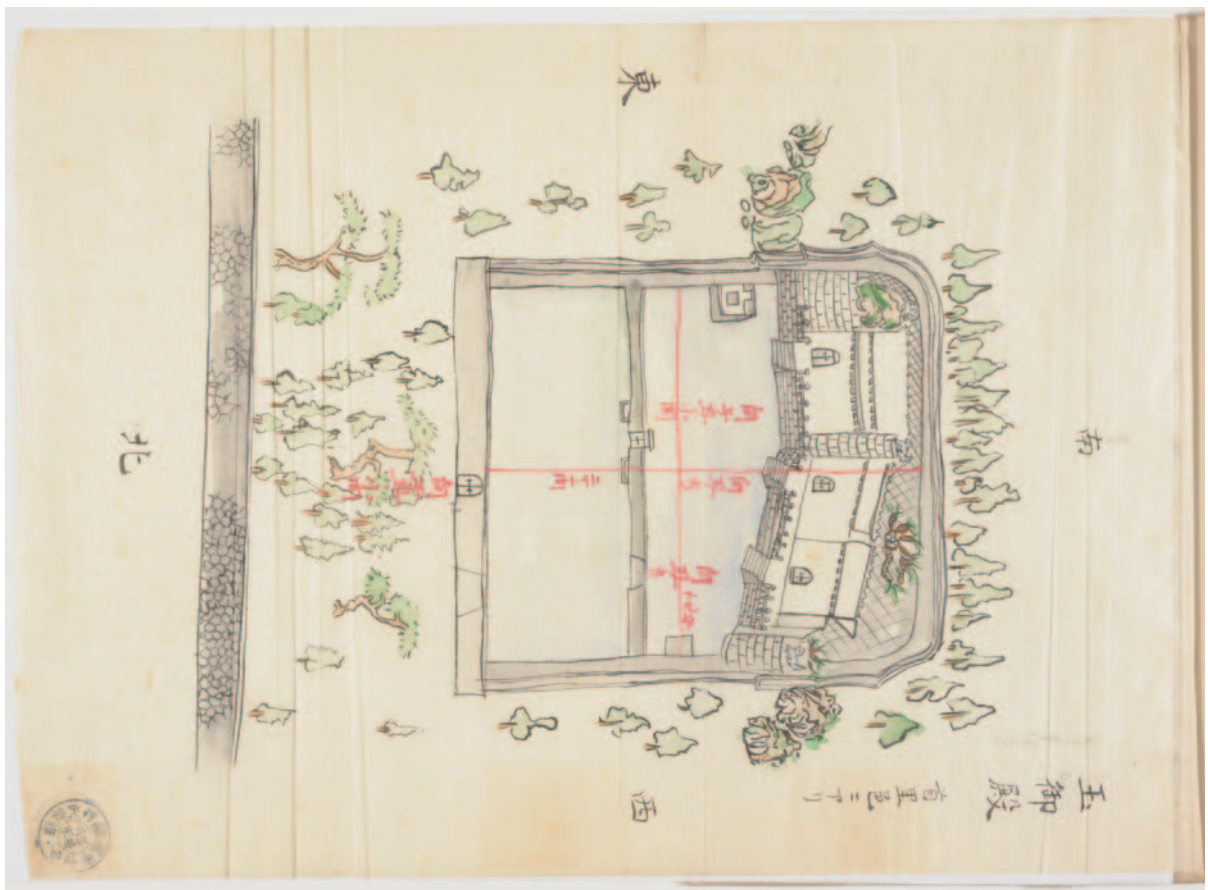


图5 「差図帳」玉御殿図



図6 「差図帳」 聖現寺図

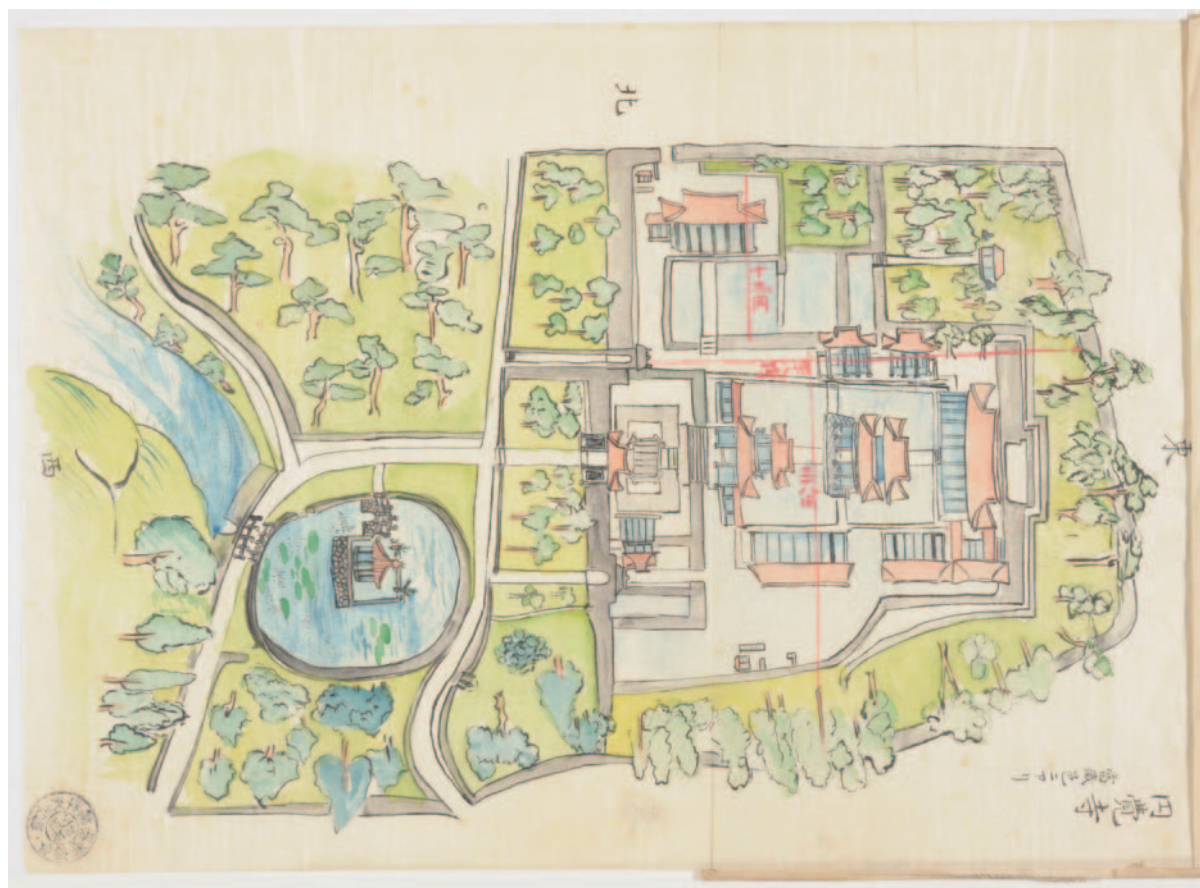


図7 「差図帳」 円覚寺図

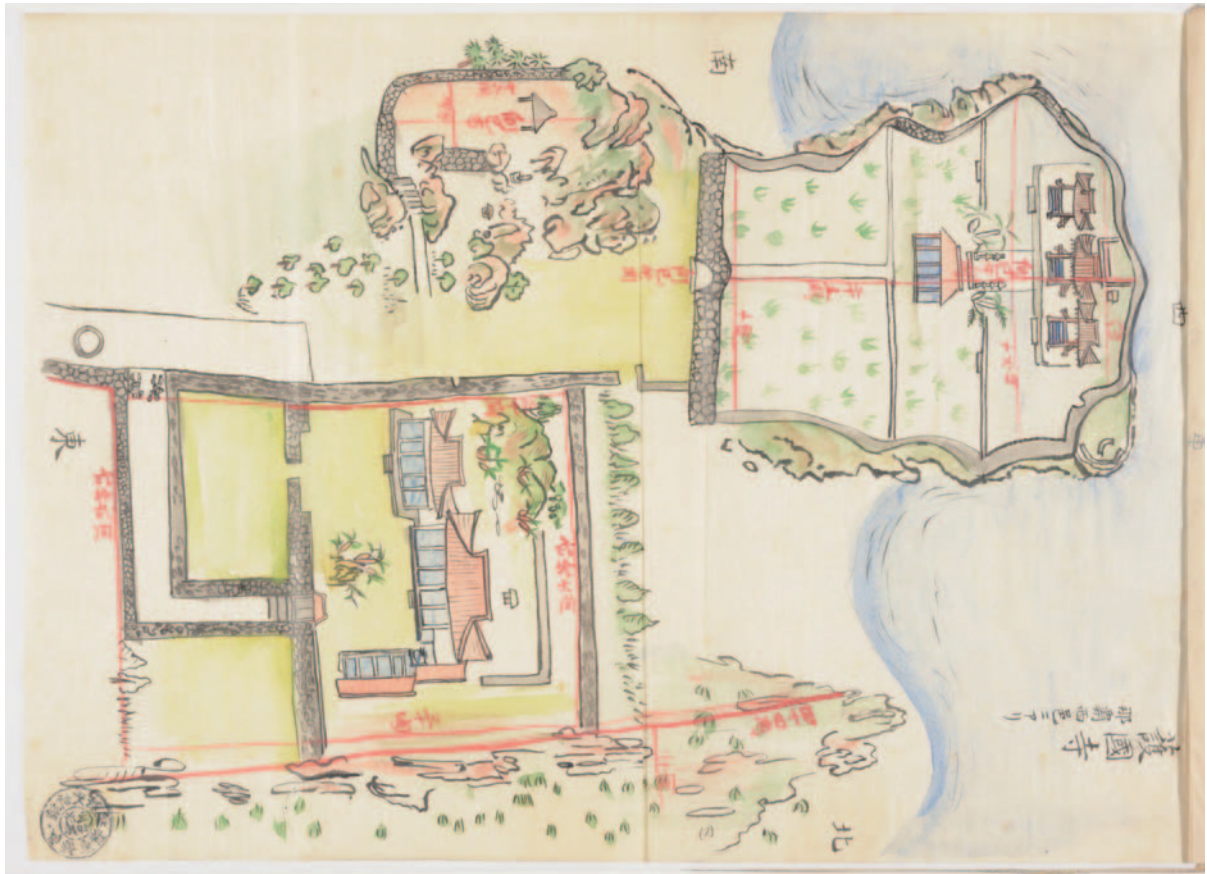


図8 「差図帳」護国寺図

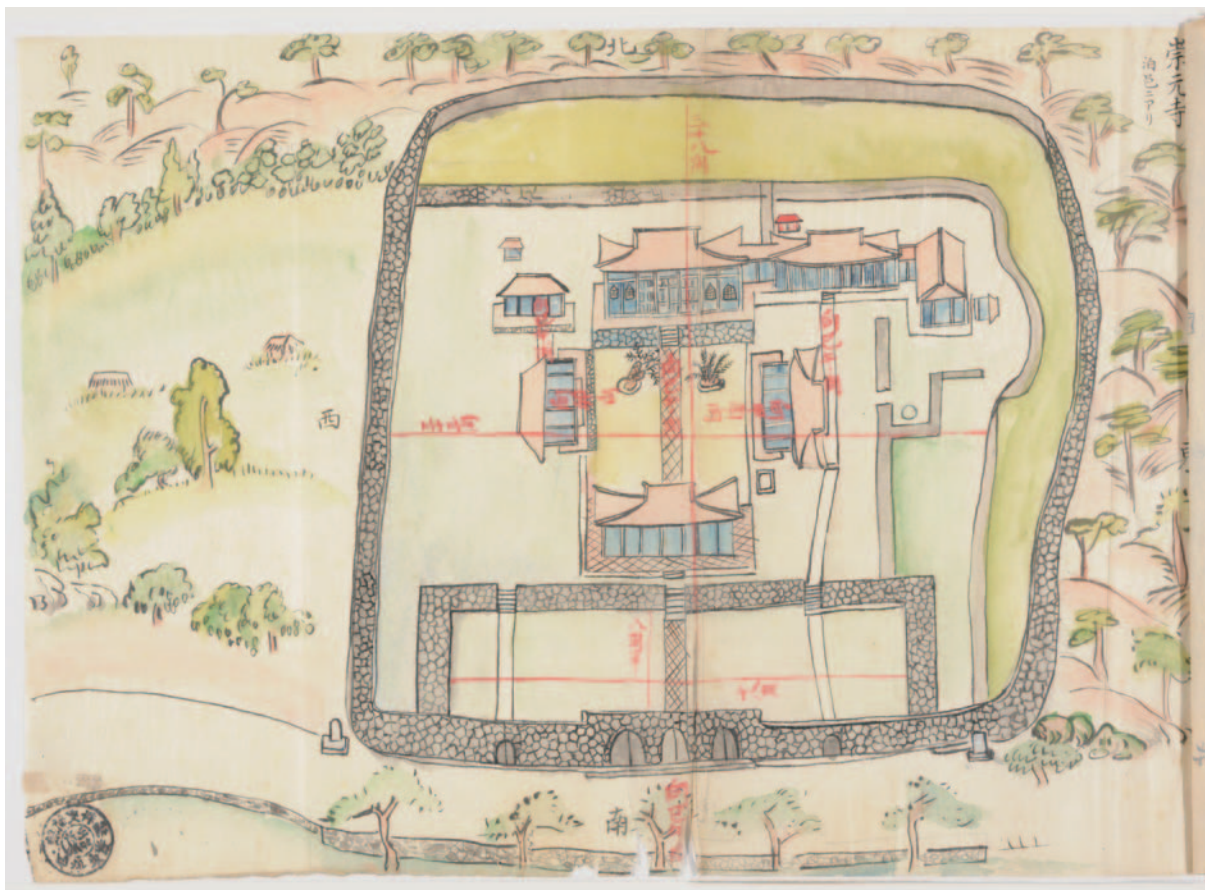


図9 「差図帳」崇元寺図